

ドロミテ

2025. 12. 11

イタリアにいたときだった。夏休みに、バカンス気分でゆっくりしようと考えた。北イタリアにドロミテというところがある。景色がいい山岳地帯である。夏である。涼しいところとなると、山に限る。

3泊4日だっただろうか。泊まった施設は、オールインクルーシブのホテルだった。食事や飲み物などが料金に含まれている。いわば、食べ放題、飲み放題である。これがよくない。そんなに食べられるものではない。ところが、イタリアの方やヨーロッパの方は、食べている。そもそも食べる量が違う。それは、普段から感じていたことだった。

ドロミテの絶景を目指してドライブをする。ホテルのテニスコートを借りて、息子にラケットを握らせる。まだ、3歳である。テニスというよりは、記念撮影が主な目的となる。したがって、ほとんど体を動かすこともない。お腹がすくわけがない。

ホテルでは、朝食や夕食以外にも、魅力的なものが並んでいる。それらに手を出してしまうと、メインの食事に影響する。それはわかっているのだが、目の前にあるものをだまって見ているのもつらい。どうしても食べたくなる。飲みたくなる。

その結果、ずっと満腹状態となる。それは、朝食を食べ終わった後からずっとそうなのである。本来、食べたり、飲んだりするのは楽しいはずなのだが、苦しみを伴うことがある。お腹がいっぱいだというのに、さらに食べなくてはいけないのは、けっこうつらいものである。

イタリアでは、いつでもどこでもお料理は美味しいのだが、食べられる量のことでは悩まされた。イタリアでは、基本的にコース料理である。アンティパスト、前菜に始まり、次がプリモ・ピアット、第一の皿となる。これは、パスタ、リゾットなど、主に炭水化物を使った温かい料理となる。我が家の場合、ここですでお腹がいっぱいとなる。まだ、セコンド・ピアット、第二の皿がある。こちらは、肉や魚などを用いたメインディッシュである。よくこんなことを言っていた。「ごめんなさい。もうお腹がいっぱいな。セコンドは一つでもいい」もちろん、このセリフを言うのは家人である。

ようやく二人でセコンドをクリアすると、デザートにあたるドルチェとなる。ティラミス、パンナコッタ、ジェラートなど、イタリアならではの甘味が中心である。そして、最後はエスプレッソコーヒーで仕上げる。

これらを約2時間かけて楽しむのである。ドロミテのホテルでは、食事以外にもさらに食べることになる。もはや苦行である。それでも、ドロミテの夏はよかった。少しは、バカンス気分を楽しむことができた。今、あのホテルに行けば、さらに食べられなくなっていることだろう。それでも、ドロミテの絶景は、変わらずに迎えてくれるに違いない。